



撮影：西山芳一（表紙、並びに当ページ）

耶馬溪橋

大分県中津市本耶馬溪町樋田・曾木

日本には一、八〇〇を超える石橋が現存しており、約九五％が九州地方に集中するとされる。中でも大分県内の石橋の数は国内最多の約五〇〇橋を数えるという。まさに石橋の宝庫だ。中津市を貫流する山国川^{やまくに}に架かる耶馬溪橋^{やばけい}はその筆頭に挙げられる橋。開通は一九二三（大正十二）年で、八連アーチ、橋長一一六㍎は日本最長を誇る。通称は「オランダ橋」。長崎県の橋に多く見られる、石材を水平に整然と積み上げる布積^{ぬのづみ}式が採用されていることに因む。

耶馬溪は、中津市山国町の西北端に位置する英彦山^{ひこさん}を発祥とする山国川の奔流に削られて形成された。絶景であると同時に、断崖絶壁が連なる通行の難所でもあった。右岸の樋田^{ひだ}地区では「川が荒れたら親の死に目に会えないから、対岸の曾木地区には嫁にやるな」と言われていたほどだという。大正期に入り耶馬溪が新日本三景に選ばれると、にわかに観光客が増加。これにより道路が整備され、耶馬溪橋はその一部として架橋される。その資金約四万円は曾木地区の村民二一名が共有林を売却して用立てたと

いう。設計は大分県技師の松永昇。地元の岩渕万吉が請け負い、施工は石橋王と呼ばれた名棟梁の松田新之助らが手掛けた。既にRCの橋梁が登場していた時期にあって、あえて石橋が採用されたのは、観光を目的としたことに加え、優れた石工が多く、良質な石材を調達しやすかったという背景がある。

上流側には堰を流下する滝音が勇壮に響き、下流側には打って変わって物静かな川面に巨岩が散在する。その表情の違いが印象的だ。この時世でも訪れる人の姿は少なくない。日本一の石造アーチ橋は単なる観光資源を超え、特異な魅力を放ち続けている。



アーチ橋はその弧が半円に近いほど強度を増すが、耶馬溪橋のアーチはやや平たい印象がある。両岸に集落と街道があり、これと接続するために橋高を護岸の高さに合わせる必要があったからだ。不安定な構造を克服する高度な石積み技術が要求されたことは想像に難くない。1944（昭和19）年の大洪水で高欄が流出するも、コンクリートで復旧。平成に入ってからセメントミルク等を注入して補強した。竣工から間もなく100年を迎える現役の美橋だ。